

機関番号：13801

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20530849

研究課題名（和文） 幼児の声の技能を引き出す歌唱教材の開発

研究課題名（英文） Development of Vocal Teaching Materials
to Bring out Young Childrens' Vocal Skills

研究代表者

志民 一成 (SHITAMI KAZUNARI)

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：50320784

研究成果の概要（和文）：幼児の声の能力，特に裏声を出す技能を引き出す歌唱教材を，全42曲開発し，個人指導での歌唱実践や，幼稚園・保育所での実践を通して，その教材の有効性について検証した。その結果，多くの教材で子どもの裏声を引き出す効果が認められ，また歌唱に止まらない，子どもの音声表現全体に刺激をもたらすことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：We developed the vocal teaching materials (all 42 songs) to bring out young children's vocal ability, especially falsetto skill. Through the individual lessons and the singing practices in kindergarten and nursery, we verified the effectiveness of the teaching materials. Many teaching materials were effective in drawing out children's falsetto. It was found that the teaching materials stimulate not only singing but also the entire vocal expression of young children.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究代表者の専門分野：音楽教育学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：歌唱教材開発、幼児の音声表現、声の技能、裏声

1. 研究開始当初の背景

保育現場においては，歌を歌う時，子どもに対して何をどう指導するかということが不明確で，音程やリズム，発音を正しく歌うということのみに捕われる保育者がいる一方，「元気に大きな声で」歌っていれば，「どなり声」や「がなり声」でも容認しているといった状況も見られる。しかし，本当にこれで良いのか，という漠然とした疑問を持ちながら，歌う活動を行なっている保育者は少なくない。

一方，これまで研究者の関心の多くは，子どもの歌唱可能な声域（テッシトゥーラ）がどう発達していくかということに置かれ，その声域に合わせて教材を選定することや，子どもにとってどのような音域設定が適切なのかということに関して議論がなされてきた（日本音楽教育学会 2002 年くらしきゼミナール・ラウンドテーブル「歌唱教材の音域は高すぎるのか，低すぎるのか！？」など）。

しかしながら，幼児期の教育において考慮すべきことは，幼児期の子どもならではの特

性を十分に踏まえること、そして、遊びを中心とした生活を通じた体験の重なりが、子どもの育ちにつながっていくという視点を持つことであると考え。研究代表者と研究分担者は、これまでの研究で、幼稚園や家庭などでのフィールドワークを通して、幼児が園生活など日常の遊びなどの中で、裏声をはじめとした様々な声を用いて表現していることを明らかにしてきた(今川・志民 2003 他)。そのような子どもが見せる多彩な声の表現は、高度な声のコントロール技能によって実現されており、これらの技能の発動には、「他者との関係性」「イメージの喚起」「身体性」が関わっていることを見いだした。

この3つの視点を踏まえ、子どもがすでに生活の中で発揮している声の能力を、歌唱において生かし、引き出すためのはたらきかけを行なうことにした。これまで研究代表者らは、幼稚園に出向いて音楽活動を実施し、子どもがイメージをはたらかせ、身体を積極的に動かしながら、様々な声を出したり、歌の中で裏声などを使ったりすることを促す試みを行ってきた。ここでの成果を足がかりとして、子どもの声の技能、中でも裏声を出す技能にはたらきかけるためのオリジナルの教材を開発することにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、子どものすでに持っている声の能力にはたらきかけ、その能力を歌唱の際の高音域の発声に結びつけるためのきっかけとなる教材を開発し、その有効性を検証することである。

従来あるような、子どもの歌唱可能な声域についてのデータを根拠に、その範囲内に限定して教えようという考え方ではなく、生活の中で培われつつある声の能力を最大限に引き出し、継続して刺激していくことで、歌唱という表現形態における技能への適応を促そうというのが本研究のアプローチである。

歌唱において高音域を歌うためには、音声生理学的に「軽い声 light」に位置づけられる、いわゆる「裏声」を用いることが不可欠となる。そのためには裏声を用いたり、表声と使い分けたりしながら歌うという技能(換声)が必要となってくる。子どもはすでに日常生活や遊びの中で、裏声をはじめとした様々な声を用いて自在に表現しており、そういった声のコントロール技能を生活や遊びの中で獲得しているのである。このような子どもの遊びの中に見られるような、イメージにもとづいて裏声を導き出すといった技能を生かし、子どもの表現したい、という意欲にはたらきかけ、想像力や感性を刺激しつつ、歌唱における声のコントロール技能の発達を促す教材を開発していきたいと考えた。

音程を正確に歌うといったような、幼児の生活と切り離れた特定の技能を身につけさせるための練習曲やメソッドとしてではなく、子どもが自らの経験の中から自分に適した表現方法を見つけ出していくという、自己の「表現する過程」を尊重しようというのが本研究のスタンスである。そのようなプロセスを経ることが、現在、教育の課題として中心に据えられている、子どもの「生きる力」を育てることにおいて重要ではないかと考える。

このような、生活における経験に根ざした子どもの表現力の伸長が、我々の研究のねらいであるが、その成果としての教材や指導法はもちろんのこと、「子どもの声をいかに育てるか」ということについても、保育の現場、そして音楽教育に携わる方々に提案を行なっていくことを目的とした。

3. 研究の方法

①教材開発のための基礎研究および仮説の構築

これまで研究代表者らが行ってきたフィールドワークにもとづいた考察からは、教材開発への多くの示唆が出てきている。これらのさらなる考察の深化と整理を進める必要があった。また児童合唱団でのフィールドワークで収集した個別歌唱の音声データを活用し、再度子どもの声の特徴について詳細な分析を行なった。

これら子どもの音声表現の特徴を整理した中から、教材開発に向けての仮説を構築していった。研究開始当時、かなりの仮説を得て教材開発に生かしていたが、その後、教材の試行と実践結果の分析を経て、さらに仮説の再構築を行なった。

②教材の開発

①で得られた示唆や仮説をもとに、教材開発を行なった。研究代表者と研究協力者(音楽家、作曲家)で協議しながら、子どものイメージを喚起しやすい歌詞の選定、裏声を引き出しやすいメロディーや音域を考慮した作曲を進めていった。また、教材として適した歌詞を選定することが困難なため、実践者自ら作詞作曲も行なった。

③幼稚園・保育所等での教材の試行

東京成徳短期大学附属第二幼稚園に加え、静岡大学教育学部附属幼稚園での教材の試行を行なった。教材開発に当たった研究代表者と研究協力者が直接、園に出向き指導した。実践の様子は、観察補助員がビデオカメラと小型デジタルオーディオレコーダーで記録するとともに、並行してフィールドメモを取り分析を行なった。

また将来的に保育者自身に教材を活用し

てもらいたいというねらいから、実際に保育者に指導を依頼するために、曲の演奏サンプルを録音した音源を制作するとともに、指導のための手引きを作成した。

なお、この2園での実践において高い成果の認められた教材について、立教女学院短期大学附属天使園や、埼玉県川口市の北川口幼稚園や芝高木保育所で指導を試みた。

④個人の音楽教室等での個人データの収集

③では一斉歌唱におけるデータが主になるため、ここでは、教材によって一人の子どもの声のコントロール能力がどのように引き出されたか、という個人データを収集した。ピアノ等の個人レッスン指導を行なっている研究協力者に、開発した教材を使った歌唱実践を試みてもらい、デジタルオーディオレコーダーで音声データを収録した。歌唱実践は2組4名の幼児および小学生を対象に、延べ110回以上行なった。なお、研究協力者には事前に研究の趣旨と目的、教材と指導法について詳細を説明し、十分な理解を得られてから実践に入った。

⑤結果の評価と教材・指導法の普及活動

③と④の試行で得られた音声データや映像記録、指導の記録等を分析し、教材の有効性と指導法の評価を行なった。④では音声データの機器を用いた音声分析を行ない、声のピッチや、裏声・表声の換声点等のデータを分析した。これらの評価は、教材の改善や新たな教材の開発へフィードバックし、より効果的な教材開発に生かした。

さらに、単に高い声が出るようになったかといった評価だけでなく、子どもの日常の音声表現全体や遊び、また音に対する反応などに変化が見られたかどうかを含め、子どもの感性や想像力、表現力などにどのような影響を与えたかについても検証した。

4. 研究成果

(1) 教材の開発

子どもの音声表現の特徴を整理した中から、教材開発に向けての仮説を構築し、裏声を引き出しやすい旋律や音域を考慮した作曲を進めていった。また、教材として適した歌詞を選定することが困難なため、実践者自ら作詞作曲も行ない、合計で42曲の歌唱教材楽曲を試作した。

開発した主な教材は、以下の通り。

- ①動物の鳴き声や擬音表現を手がかりにした教材
 - 《カワセミくん》《ニャンダフル》
 - 《れんこん》《こおろぎさん》
 - 《ふみきり》《おばあちゃん》
- ②小さいものをイメージする教材
 - 《大きな手小さな手》《ちっちゃなかぜ》

- ③動きや運動感覚など身体感覚との結びつきをイメージした教材

《トランポリン》《スリッパリッパ》
《カンガルーはかんがえる》

- ④息を吸う感覚との結びつきをイメージした教材 《ストロー》(楽譜参照)

- ⑤浮遊感、軽やかさ、薄さなどの身体感覚との結びつきをイメージした教材

《雲のわた菓子》(楽譜参照)
《ロープウェイ》《空を歩けば》

《さくらのはなびら》《たまねぎ》

《コスモスのゆめ》《たんぼぼわたげ》

- ⑥寒さや冷たさなどの感覚を起点とした教材 《ゆきの日》《きたかぜふくよ》

- ⑦「ひそやかな」や「ミステリアスな」イメージを起点にした教材

《まんげきょう》《おつきさま》

・開発した教材の例

ストロー 志民一成 作詞・作曲

Musical score for 'ストロー' (Straw). The score is in 8/8 time and G major. It features a melody with lyrics: ストロー スー スー チュー チュー チュー チュー チュー チュー. The lyrics continue on the next line: おい し い な ス ト ロ ー スー スー. The final line of lyrics is: チュー チュー スズ スズ もう お し まい?

雲のわた菓子 作詞：志民一成
作曲：寺内大輔

Musical score for '雲のわた菓子' (Clouds and Candy). The score is in 8/8 time and G major. It features a melody with lyrics: くも の わ た が し あ っ た ら い な ふ わ ふ わ こ ん で. The lyrics continue on the next line: と お く ま で お な が が す い た ら ち ょ っ と た べ て. The final line of lyrics is: む ぐ っ た ら ち ょ っ と た べ て そ ん な わ た が し あ っ た ら い な.

(2) 教材の有効性の検証

試作した教材は個人レッスンの歌唱実践にて試行を行なった。随時、実践結果を分析し、それをもとに仮説の再構築を行ないながら、教材の修正や新たな教材の開発、そして指導方法の改善を行なった。

実践の結果、裏声の技能を引き出すことをねらいとして開発した教材の有効性について、以下の3点の結果を導き出した。

- ①開発した教材を用いた実践は、幼児の裏声を引き出す上でかなりの成果を上げられた。どのような旋律の音形や音域が、裏声への換声を引き出す上で有効であるか、などの示唆を得ることができた。また、裏声を引き出す上で母音や子音の影響は顕著であり、特に母音の要素が好ましい声質の裏声を引き出す上で、大きく左右することが明らかになった。
- ②幼児の裏声を引き出す上で、擬音表現の活用や、身体感覚との結びつきを喚起するイメージの有効性が、非常に高いことが明らかになった。

かとなった。しかし、一部で十分な効果を得ることのできなかったものもあり、イメージを声の技能に効果的につなげるためには、発達段階に応じた教材の選択が肝要であることがわかった。

- ③単に教材を歌うだけでは裏声を引き出すことが容易でない教材もあり、イメージをより喚起させたり、身体感覚へはたらきかけたりするような、指導者の言葉掛けや活動が不可欠であり、そういった指導方法が重要な位置を占めることが明らかとなった。

(3) 教材を用いた歌唱実践の実施

個人レッスンでの試行で効果の高かったいくつかの教材については、幼稚園や保育所で歌唱実践を実施し、幼児の裏声を引き出す上で、開発した教材が有効であることがあらためて確認された。

また、教材を用いた歌唱実践の前後に、裏声を出して表現する様子が見られるなど、子ども達が裏声を使うことに興味を持ち、裏声を使う感覚を刺激できたことも大きな成果であると考えられる。

- ①東京成徳短期大学附属第二幼稚園（2008年8月29日、2009年8月27日、2010年8月30日）。4歳児クラスを対象に教材を用いた歌唱実践を実施。
- ②静岡大学教育学部附属幼稚園（2008年9月～2010年3月）3歳児クラスで教材を用いた歌唱活動を開始し、4歳児クラスになってからも引き続き実践。
- ③立教女学院短期大学附属天使園（2009年2月26日）教材を用いた歌唱実践を実施。
- ④北川口幼稚園、芝高木保育所（埼玉県川口市、2011年3月9日）それぞれ4歳児クラスを対象に教材を用いた歌唱実践を実施。

(4) 普及活動

小・中学校の教師を中心にした研修会等で、子どもの「声の育ち」を支えていくための歌唱指導のあり方について話すとともに、その具体的な方法の一つとして、開発した教材のいくつかを紹介した。

- ①静岡大学教育学部附属浜松小学校教育研究発表会音楽科分科会講演「子どもの声を育てる」にて歌唱教材を紹介（2010年10月15日）。
- ②静岡市小中学校音楽学習交流会の教員研修会にて歌唱教材を紹介（2010年11月25日）。

(5) 成果と今後の展望

学会での発表や幼稚園・保育園での実践、また普及活動において、開発した教材が関心や期待を持って受入れられたという手応えを強く感じた。実際に教材を指導で用いたいという問い合わせも多数あり、これからの実

践での広がりが期待される。

また、教材自体に対する注目に止まらず、大人から見た歌唱における技能の用い方ではなく、子どもの普段使っている声の能力の発動の仕方を軸に置くという、というスタンスそのものにも、理解や賛同する旨のレスポンスが多く得られた。

今後は、そのような「子どもの声を育てる」という方向性での研究をさらに押し進め、本研究での成果を踏まえつつ、さらなる教材開発や教育プログラムの開発及び実施、そして保育者・教員養成の実践的プログラムの開発を目指していければと考える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 志民一成，中村かおり，幼児の声の技能を引き出す歌唱教材の開発（2）教材を用いた個人指導における成果の総括，静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇），査読有，Vol.42，2011，pp.193-210
- ② 志民一成，中村かおり，幼児の声の技能を引き出す歌唱教材の開発 裏声の技能に着目して，静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇），査読有，Vol.41，2010，pp.193-210

〔学会発表〕（計5件）

- ① 今川恭子，志民一成，子どもの声と音楽表現（9）音声表現の育ちを支えるもの，日本保育学会第64回大会（玉川大学），2011
- ② 志民一成，今川恭子，子どもの声と音楽表現（8）日常の音声表現と歌唱を結ぶ声の技能，日本保育学会第64回大会（玉川大学），2011
- ③ 志民一成，中村かおり，幼児の声の技能を引き出す歌唱教材の開発（2）教材を用いた個人指導における成果の総括，日本音楽教育学会第41回大会（埼玉大学），2010
- ④ 志民一成，今川恭子，子どもの声と音楽表現（7）歌唱教材開発の目指すもの，日本保育学会第63回大会（松山東雲短期大学），2010
- ⑤ 志民一成，中村かおり，幼児の声の技能を引き出す歌唱教材の開発 裏声の技能に着目して，日本音楽教育学会第40回大会（広島大学），2009

〔図書〕（計1件）

小川容子, 今川恭子, 水戸博道, 志民一成,
音楽する子どもをつかまえない ―実験研
究者とフィールドワーカーの対話, ふくろ
う出版, 2008, pp.93-112

6. 研究組織

(1) 研究代表者

志民 一成 (KAZUNARI SHITAMI)
静岡大学・教育学部・准教授
研究者番号: 50320784

(2) 研究分担者

今川 恭子 (IMAGAWA KYOKO)
聖心女子大学・文学部・准教授
研究者番号: 80389882

(3) 研究協力者

石川 眞佐江 (ISHIKAWA MASAE)
静岡大学・教育学部・助教

中村 かおり (NAKAMURA KAORI)
掛川市立大須賀中学校・講師

廣木 良行 (HIROKI YOSHIYUKI)
東京成徳大学・非常勤講師, 作曲家

寺内 大輔 (TERAUCHI DAISUKE)
広島大学大学院・非常勤講師, 作曲家

土屋 朱帆 (TSUCHIYA SYUHO)
東京成徳短期大学・非常勤講師, 声楽家